

有道画伯の日本画 ありませんか？

来年1月に作品展を計画

著述家の蒲田正樹さん

綾部出身の画家・有道佐一（1896～1983）に関する書籍「自適の人・有道佐一」を7月に上梓した著述家・蒲田正樹さんが、家庭などで「眠る」有道の日本画の作品を探している。中央画壇と一線を画した有道は、洋画はほとんど手放さなかった一方、日本画は頼まれれば断ることなく応じたといひ、蒲田さんは「古いお宅では有道画伯の掛け軸などを所有している方もたくさんおられるのでは」と推察。協力者から作品を借り受け、来年1月に作品展を開きたい考えた。

【高崎健太】

8月6～18日に京都 佐一回顧展は2500
市京セラ美術館で開か 0人超の来場者で大盛
れた「没後40年・有道」況となった中、山家の



日本家屋の「ことばの泉・ねじ文庫」で「明月照霊峰」(左)と「天馬図」を紹介する蒲田さん(右)若松町で

四季などを描いた油絵
とともに来場者の心を
つかんだのが、主に人
生の後半で取り組んだ
日本画の数々だった。
来場者の感想を回顧
展世話人会がまとめた
「ひとこと集」でも、
「風景画だけでなく、掛
軸の迫力には(本当に)
同じ人物かと思えるよ
うな力強さを感じた」
「水墨画では打って変
わってとても爽快でユ
ーモラス」「精緻な油
絵から一転！ の水墨
画にびっくり！」など

絶賛の声が相
次いだ。
また蒲田さ
んは、世話人
会の一員でも
ある星野画廊
(京都市)の
星野桂三さん
から「日本画
は美術館やギ
ャラリーでな
く日本家屋

で、床の間などに飾つ
て畳に座って鑑賞する
と、また違う趣がある。
新しい気づきが得られ
る」と聞かされた。
これをヒントに思い
立ったのが、来年1月
の作品展。会場に選ん
だのは、東京に事務所
を構える蒲田さんが
「サテライトオフィス」
として若松町の借家を
借り、そこで2021
年から開設している
「ことばの泉・ねじ文
庫」。昭和40年代に建
てられた日本家屋で1
階と2階に床の間があ
ることから、「昭和の
空気感」が漂うこの会
場で、有道の日本画作
品を鑑賞してもらおう
と考えた。

蒲田さんがこの作品
展を思い立ったのに
は、もう一つ理由があ
る。それは、自身でも
有道の掛け軸2点を所
有していることだ。い

埋もれた作品、再発掘したい

ずれもインターネット
オークションを通じて
古美術商から購入した
もので、1点は昨年8
月に落札した「明月照
霊峰」(1938年)
で、もう1点は先月落
札したばかり
の「天馬図」
(1966年)
だ。

有道の日本
画について
は、蒲田さん
が著書でも
「フランスか
ら帰国後しば
らくは、ほぼ
毎日、数十人
がやってき
て、色紙(画
賛)などの求
めに応じてい
て、早朝4時
から深夜12時まで対応
に追われていたとい
う」と触れている通り、
一般家庭などでも本人
から譲り受けた作品が
眠っている
可能性が高
いという。
「アート
でつながる
もうひと
つ」の有道佐
一展」と題
する今回の

【9月30日】(届出日)
村木蒼波ちゃん
(源周さん・男児)
若松町

【10月1日】
三和楓果ちゃん
(尚史さん・女兒)
瀬垣町

作品展では、協力が得
られた人から作品を借
り受けて一挙に展示し
たい考え。「有道画伯
の足跡をたどりつつ、
それを次世代にしまか
りつなげていきたい。
また埋もれていた作品
を再発掘できれば」と
願いを込めている。

2カ所の大震災害
市が義援金箱設置

市は、「令和6年7月
25日からの大雨災害義
援金」(対象地域「秋
田県、山形県」と「令
和6年9月能登半島大
震災義援金」(同「
石川県)の義援金箱を、
市役所本庁舎玄関に設
置した。期間は「7月
25日からの大雨災害義
援金」が12月25日まで
で、「能登半島大雨災
害義援金」が来年3月

有道直筆の「箱書き」が墨書された掛け軸
「明月照霊峰」の木箱。この筆跡や落款印が、
真筆かどうかの手掛かりの一つになる

